

日吉台地下壕保存の会

会報

第4号

発行 日吉台地下壕保存の会

編集 事務局

〒223

横浜市港北区下田町3-15-27

TEL 044-62-1282 (寺田貞治)

目次



地下壕の説明に聞きいる会員

◎重要な局面にさしかかった保存会の活動	1
◎第6回幹事会報告	2
◎第7回幹事会報告	2
◎昭和の激動の嵐が通り過ぎて行った日吉	3
◎横浜にも平和教育学級を	4
◎時の流れに	5
◎編集後記	6

重要な局面にさしかかった
保存△云の活動
事務局長 寺田貞治

会員数は二百四十四名に達しました。保存会の活動も広がりを見せ、地下壕の展示や、見学が増えてきました。マスコミの取り上げ方も、しだいに大きくなってきました。先日のT.V.Kの放映は十五分と長く、地下壕に关心を持つ人々も増えてきました。区役所の職員の方も松代に行かれ、保存の実態を視察され、いよいよ保存の具体化に向けて、基礎調査のまとめの段階に入ろうとしています。地元の関心も高く、日吉地区会議からも「地下壕の保存について」の要望書が区長宛に出され、期待されています。多くの会員を増やし、保存会の活動を更に活発にしていきたいと思います。今後ともよろしくご支援、ご協力をお願いいたします。

第十八回

幹事会云報出

十月十八日に慶應義塾藤山記念館中会議室で開かれた。オブザーバーとして区役所の職員も参加された。

○報告事項

事務局長より

①団体会員として、日吉T

F会より、五口（一万円）で

入会申込があった。②地下壕

見学実施＝十月十二日港北区

内中学生社会科教員二十数名、

十月十五日保存会会員十五

名。③地下壕見学会予定＝十

一月十四日大学生協東京地連

中央ブロック平和交流会、十

二月二日日吉台西中学校教職

員・PTAOB。④「日吉台

地区会議からの要望」とし

て、港北区区長宛に日吉地区

連合町内会長秋本謙三氏と区

民会議運営委員四名連記で
「地下壕の保存について」要
望書が出された。⑤ヒアリン
グ実施＝十月十八日「海軍の
組織・機構について」吉田昭
彦氏（海軍戦史研究家）から
話を聞く。⑥慶應藤沢キヨバ

スから地下壕発見＝文化財調
査委員より連絡あり。⑦マス
コミ関係＝十二月二日テレビ

神奈川が取材予定。⑧慶應生
協ニュース第四十九号に「日

吉台地下壕について」民家の
方の話を収録。

○議事
次の具体的活動ならびに会
報第四号の発行について、次
回の幹事会で決めるというこ
とで散会した。

次回幹事会は十一月二十九日
五時に予定。

第十七回

幹事会云報出

十一月二十九日に慶應義塾
藤山記念館中会議室で開かれ
た。オブザーバーとして、テ
レビ神奈川の記者も参加され
た。

○報告事項

事務局長より

①十一月一日＝日吉台中学

校で地域探訪会のクラブが日

吉台地下壕の展示をした。②

十一月四日＝大学生協東京地
方連合会主催の平和フェス

ティバルを渋谷会館で開いた

際、中央ブロック（東大・慶
應・早稲田・法政）教職委員

会として日吉台地下壕の展示
会をした。同時に、保存会へ

の入会をよびかけた。③十一

月十日＝松代大本營の保存を
すすめる会主催の十一月十一

日の「第三回松代大本營の保
存をすすめる集い」いま、マ

ツシロから——」に、日吉台

地下壕保存の会から連帯の
メッセージを送った。④十一

月十一日＝大学生協東京地連

中央ブロック教職委員会主催

の平和交流会（慶應担当）

で、地下壕を見学。十二名参

加。⑤十一月二十二日＝慶應

労組の文化祭に、日吉台地下

壕の展示と、地下壕のビデオ

を流して保存会への入会を呼

びかけた。⑥十一月二十三日

＝松代新聞社の記者が取材に
来て、日吉台地下壕と一緒に
入った。来年の一月一日に新

聞に掲載の予定。⑦十一月二

十八日＝二十九日＝港北区役所

の職員が、松代の地下壕を視

察し、長野市役所で保存の方

法について調査の予定。⑧十

月二十九日＝テレビ神奈川
とビデオ撮りの打合せ。十二

月八日＝TVグラフィック4
2番街で、午後八時五分か
ら十五分間放映予定。⑨十二

月二日＝日吉台西中学校教職
員・PTAOB（森戸会）会

員が、地下壕を見学の予定。

このときTV神奈川も一緒に
入り、ビデオを撮る。⑩十二

月二日の地下壕見学会に特別
参加された連合艦隊司令部幕

僚付従兵であった根本和夫氏
より、保存会へ一万円のカン

ペがあった。⑪日吉商店街情
報誌「ひよし」（十月発刊）

のNo.1に「昭和の激動の嵐
が通り過ぎていった日吉」と

いうタイトルで、地下壕に関
する記事が掲載された。この

記事は本会報に転載した。

幹事より

久我氏からつぎのような報
告があった。①米国から資料
を取り寄せ現在調査中であ
る。②日吉に関係する所を探
し、再度資料を取り寄せて調
べてみる。③米国の資料のう
ち、かなりのものが日本の国
会図書館にもあるらしい。

○議事

①当面の活動計画について
②箕輪・日吉本町の地下壕の調査を十二月二十五日以降に
行う。来年三月頃公開ヒアリ
ングを行う。③聞き取り調査について、朝鮮人労働者に関することが、まだ不明な点が多く、調査が必要である。④会報第四号の発行は十二月中にやる。⑤次回幹事会は来年一月十七日。終了後、幹事会の新年会を行う。

○第七回幹事会後の動き

①十二月二日、日吉台西中学校教職員・PTA・OB会会員が地下壕見学。三十数名参加。

②十二月八日、TV神奈川で参加。

③十二月九日、日吉地区会議が開かれ、区長宛の要望事項の「日吉台地下壕の保存について」討議され、全員一致で地下壕の保存と、資料館の建設をすすめていくことを確認した。

④区役所のプロジェクトのチームの打合せを年内に行う予定。

昭和の激動の嵐が通り過ぎて行つた日土口 寺田貞治

日吉の町が発展しはじめたのは、東横線の開通（昭和二年）と慶應大学の予科の日吉移転（同九年）がきっかけであった。これらに伴つて日郵便局が開設（同九年）され、続いて日吉電話局も開設

（同十一年）された。また、

日吉の横浜合併の公約によつて水道（同十三年）やガス

（同十四年）が入つた。

昭和十六年十二月、太平洋戦争が始まるとともに日吉の街にも敗戦色が濃くなつて

いた。戦争も末期に近づいた。昭和十九年二月、日吉の慶應キャンパスの予科校舎の一

部に海軍軍令部第三部（情報

部）がやってきた。七月頃か

下に連合艦隊司令部の地下作

戦室の設営が始まり、九月末

に連合艦隊司令部が陸に上

り、寄宿舎と地下壕に移つて

下壕の保存について討議さ

れ、全員一致で地下壕の保存

と、資料館の建設をすすめて

いくことを確認した。

④区役所のプロジェクトのチームの打合せを年内に行う予定。

司令部の地下壕は、長さ約1kmで厚さ約四十cmのコンクリートで覆われ、幅約三メートルのトンネルになっている。

地下壕は、その後も引き続

り、定期で掘り続けられ

た。昭和二十年三月頃から次

所バッテリー室、空調室、長

官の寝室、井戸、ジーゼル発

電室、冷却水槽、物資貯蔵所

などがある。当時通路は、片

側にベッドが他の側に物資が

置かれ、人一人やつと通れる

ぐらいであった。また、湿気

が多くて、机など反り返つて

しまつたという。

たて穴が二つあり、丘の上

から地下壕までの深さは約三

十メートルである。長官や幕僚は殆

んど寄宿舎にあって仕事をし

ていた。食料は比較的潤沢

で、当時の民間より遥かに良

かつたという。

情報部は、昭和二十年の始

め地下壕に移った。情報部

は、ここで全世界の様々な情

報を受けとり、分析していく

のである。当時、軍の上層部

は情報部の情報を軽視していなかったといわれるが、戦後米軍から高く評価されたという。昭和十九年十月に海軍水路部が

工学部の木造校舎に入つて情

報部の印刷をしていた。

地下壕は、その後も引き続

り、定期で掘り続けられ

た。昭和二十年三月頃から次

所バッテリー室、空調室、長

官の寝室、井戸、ジーゼル発

電室、冷却水槽、物資貯蔵所

などがある。当時通路は、片

側にベッドが他の側に物資が

置かれ、人一人やつと通れる

ぐらいであった。また、湿気

が多くて、机など反り返つて

しまつたという。

たて穴が二つあり、丘の上

から地下壕までの深さは約三

十メートルである。長官や幕僚は殆

んど寄宿舎にあって仕事をし

ていた。食料は比較的潤沢

で、当時の民間より遥かに良

かつたという。

情報部は、昭和二十年の始

め地下壕に移った。情報部

は、ここで全世界の様々な情

報を受けとり、分析していく

削は、最初第三〇〇設営隊が
km以上に達する。地下壕の掘

され、真福寺や興禪寺などでも授業が行われた。十月に日吉台小学校に海軍の功績調査部が入った。

本格的にやつた。その他に民間の鉄道工業株式会社（トヨネルを掘る会社）が請け負つて、約千人（日本人社員三百人、朝鮮人労働者七百人）が掘削に従事していた。

朝鮮人労働者は、ボロボロでつぎはぎだらけの服をきて、二十四時間ぶつ通して三交代制で、一番危険な所を掘らされていたという。また、飯も十分与えられていないなかつたせいか、おなかをすかし警備隊の烹炊所によく残飯をもたらしにきたという。近くの農家のの方も見るに見兼ねてご飯を食べさせてあげたこともあつたようである。

地下壕の出入口付近の農家は海軍に強制的に土地を買い上げられ、家を移動させられ、ガタガタになった家に住まわされたあげく、空襲で焼け出されてしまつた。

空襲では、焼夷弾攻撃によつて箕輪、日吉本町などがやられ、大聖院はじめ、三十軒近くの民家が焼失した。

日吉地区は、大空襲が四月四日、四月十五日、五月二十四日の三回あつた。四月四日の空襲では、宮前、日吉本町、箕輪町、新吉田町がやられた。宮前のある農家では、二百五十㌧爆弾によつて四人が死亡した。五月二十四日の

かことごとく焼失し、一人が死亡した。また宮前では三十分近くの農家が焼失した。この時の攻撃は油脂焼夷弾と爆弾によるものであつた。

届かず炸裂していた。一度、墜落しつつあったB29爆撃機から落下傘でおりてきた飛行士が、日吉本町の大きな木にひっかかっているのを目撃して、住民が殺してやるとつるはしで殴り、眉間にけがを負わせた。驚いた警備隊が駆け付けてきて、連れ去ったといふ。

米軍が撤退し、慶應高校・
大学が帰ってきて、漸く日吉
の町に本来の活気が出てきた
のであった。

日吉の慶應大学の下に地下壕があるらしいという話は以前から聞き知っていた。たまたま一年ほど前に、「寺田先生という方が熱心に追跡調査されていてる」という噂を知人

から知られ、さらに今年の春ごろ、「地下壕を歩いてきましたよ」という人の話を身近に聞いて、近いうちにぜひ入ってみたいと思っていた。

そんな思いを抱いている矢先のことこの夏に、ついお隣りの川崎市中原平和教育学級の主催で「謀略秘密基地、登戸研究所の謎を追う」という催しが現地（旧陸軍登戸研究所）で、見学を兼ねて開かれることが小さな新聞記事としてのつっていた。

参加して心に残ったのは、この催しを川崎市の教育委員会が積極的に推進しているということだった。聞きなれない「平和教育学級」というのは「教育委員会が川崎市平和推進施策の一環として一九八五年度から主催している市民向け講座のこと」であり、「学級の開設には公募による企画委員会を設け、市民の手作りによるプログラムの編成」を行い、「市内の七市民館では平均三年間ほどの継続事業として系統的に開設されて

いる」と、その時買い求めた中原平和教育学級編集委員会発行の『私の街から戦争が見えた』という本の巻末に書かれていた。

地下壕への誘いに初めて参加したのが十月十五日だった。晴らしい秋晴れの日だったが、集まつた十五人ほどの面々は、ズボンに長靴、帽子に軍手と、秋日和には似つかわしくない風態だった。集合場所で寺田先生から、地下壕建設の着手から敗戦までのあらましと、壕の概略図の説明を受けた。

そのあと先生を先導に、手に手に持つた懐中電灯のほのかな灯りをたよりに、壕内を実地、探査した。敗戦間際の一年間ほどの間に、海軍の司令部の根拠地にすべく、ほとんど素手とモッコで早急に掘り進められたという。鉄道工

業株式会社（社長菅原通斎）という民間の会社から投入された労働者千人のうち、七百人は朝鮮人、しかも彼らは常に危険な場所を受けもたされたとのことだった。

時々ぬかるみに足をとられながら、しばらく歩き進んだ所で、全員一斉に灯りを消し、一分間の黙祷を捧げた。まさに真暗闇のじじまの中での一瞬、工事中に犠牲になつた人々に頭をたれたのだつた。やはり「ここにも朝鮮人が！」という思いは、何ともやりきれない重圧感となつてのしかかってくる。その実体についての調査も始められたばかりでのようだ。

私が川崎市の例を書き連ねたのは、私達のすぐ近くにも、こうした生々しい戦争の傷跡が放置されたままになつてゐるということ、それらを実際にさわって歩いて感じとり戦争の本質を地域から掘り起こし、眞の平和の礎にしたいと切に考えるからである。

太平洋戦争が終結してから四十四年。激動の昭和の時代から、今や平成の時代へと、時は移り変わつた。

「國破れて山河あり、城春にして草木深し……。」杜甫の白眉の詩は、敗戦を身に沁みた幾多の国民から、どれほど共感と感銘を受けたことであろう。

二十五年前の日吉地区も、草木深い日吉の台地を中心、低地には川が流れ、見渡す限りの田圃が展望できた。春には子供たちは、田圃の畦

からつて地下壕ができた頃、ながら、しばらく歩き進んだ日吉の校舎には学徒動員で駆り出されたために学生の姿はなく、代わりにカーキ色の軍服姿がのさばつていた。あれこれと、歴史を二重写しにしてながら、私達は帰途についたのだった。

時の流れに

仲田かよ子

太平洋戦争が終結してから四十四年。激動の昭和の時代から、今や平成の時代へと、

「國破れて山河あり、城春にして草木深し……。」杜甫の白眉の詩は、敗戦を身に沁みた幾多の国民から、どれほど共感と感銘を受けたことであろう。

二十五年前の日吉地区も、

草木深い日吉の台地を中心、低地には川が流れ、見渡す限りの田圃が展望できた。春には子供たちは、田圃の畦

から響いてくる。汗のしたたるにこやかな顔で、ボーリーに全力投球している学生たちの姿は、平和そのものだ。

興じる若人の喚声があちこちに響いてくる。汗のしたたるにこやかな顔で、ボーリーに全力投球している学生たちの姿は、平和そのものだ。

道から「日高」や「オタマジャクシ」をすくって遊び、夏には「トンボ」採りに熱中、夜の「蛙の合唱」に田圃の風情を心行くまで満喫したものである。

この良き時代も、やがて押し寄せる「高度成長」の波に浸食され、田圃は次々と「マンション」、「建売住宅」の下に姿を消して行つた。日吉の田圃風景は、もはや過去のものとなつてしまつた。

「慶應義塾」の日吉台校舎は、豊富な樹木を包含した日吉の丘にある。すでに田園は時の流れと共に消え去つたが、「義塾」は丘と共に生き残つたのである。しかし、この「平和な丘」の「下」に、意外な構築物が静かに眠つてゐるのを知る人は少ない。

伊藤正徳氏の名著「連合艦隊の最後」の第九章の冒頭に、「連合艦隊、陸に上がる。」の節があるが、実は、義塾の「平和な丘」の下には、連合艦隊司令部の「日吉台・地下壕」が太平洋戦争の末期、極秘のうちに構築され

私が日吉の住民になつたのは、昭和三十九年の暮れであるが、田園の風情を味あうと共に、慶應義塾の丘の上をしばしば散策した。しかし、お目当ての「日吉台・地下壕」の入口は遂に発見できなかつた。

「下壕」が、海軍にとって必要だったのか、の疑問も残る。この点に関して、伊藤正徳氏の「連合艦隊、陸に上がる」の箇所を参照して頂きたい。

一昨年、私は沖縄本島の「海軍司令部・地下壕」を目学したが、日吉に比べて軍艦と漁船ほどの格差を覚えた。沖縄の「素掘りの地下壕」には、海軍陸戦隊・司令官・大田大佐の最後の打電、「沖縄県民かく戦えり……」が展示され、思わず見学者の涙をそつた。しかし、「日吉台・地下壕」からは、このような感激は湧かなかった。

それは、戦争の最前線の「切実さ」と、本土の観念的な「ゆとり」との違いではなかろうか。

しかしながら、共にその保存は、戦争から平和への出発点として、歴史的教訓を残すものである。

日吉の「田園風景」の消滅、日吉の丘の「慶應義塾」、その地下に眠る「日吉台・地下壕」。私は、時の流れのなかに、「戦争と平和」、

○隔月毎に発行する当初の目標は、曲がりなりにも達成でき、ほっとしているところです。

○保存会の活動も、来年度はいよいよやまばを迎えるのではないかと思います。

○区役所のプロジェクトチームも来年の三月までに保存に向けての基礎資料をまとめて市に提出する予定になっていきます。

○地域住民からも区長宛に要望書も出され、保存に向けての動きが一段と増して来ました。私達の活動がいつか花開く日を夢見ながら、がんばっていきたいと思っています。

○ご意見・ご感想などありましたら、お寄せ下さい。今後ともよろしくお願ひ致します。

○ではよいお年をお迎え下さい。

編集後記

「過去と現在」、「観念と現実」。これらの相反する認識を胸に抱いて、家路についた。